

被災地派遣レポート〈第105回〉

都市整備局総務部職員課 工藤 寛樹さん

【はじめに】

私は、平成24年4月1日から平成25年3月31日までの1年間、仙台市へ派遣されました。仙台は私が学生時代を過ごした縁のある街であり、震災後は何かの形で恩返しをしたいという気持ちがありました。仙台に来てみると市街地には震災の跡を彷彿させるような箇所は少なく感じました。しかし、津波被害・宅地被害等に遭った場所へ行くと、再建までの道のりは近くないと実感させられました。

【業務内容】

仙台市では復興事業局生活再建支援部生活再建支援室に配属され、被災者の生活再建支援業務に携わりました。具体的に担当した業務は、生活再建支援員と支援物資の2つがあります。

生活再建支援員とは、支援員の戸別訪問等により、応急仮設住宅入居者の住まいの再建方針の早期把握を進めるとともに、被災者の自立に向けた支援体制を構築し、総合的な被災者支援を実施する事業です。いずれ仮設住宅の期限が終了した際に、仮設住宅退去後の住まいが確保できない人が出てくる恐れがあります。様々な要因から生活再建を進めることが難しいと思われる仮設住宅入居者に対しては、できるだけ早い段階からの関わりと支援が必要であるため、生活再建支援員の訪問を実施しています。区役所の福祉部門や社会福祉協議会等と連携しながら、課題の整理と必要な支援を実施しました。

支援物資に関しては、震災から1年以上が経過した今年度においても、被災者への物資提供の申し出の連絡が入りました。内容としては、消耗品等の生活関連用品の提供は比較的減り、千羽鶴や絵、手編みのマフラー等、被災者への気持ちがこもっている贈り物が増えたように思えました。提供者への対応では、なるべく提供者の趣旨を汲み取るよう努めました。市内に多数の被災者がいる現状では、物資を公平に配布することは困難です。その中で、可能な限り支援の提供を実現できるよう、柔軟な対応に努めました。

【おわりに】

私が派遣された24年度は震災から1年以上が経過したため、被災者の状況も個人によって異なっており、再建格差が生じてきた期間であったと感じております。市街地を歩いていると、一見震災の爪痕はもはやないように感じられることもありますが、まだまだ被災前の生活に戻れない人がたくさんいます。11月に個人的に行ったボランティアでは、沿岸部の自宅に隣接する畑の清掃をしましたが、いまだに畑からは漂流物の瓦礫やプラスチックが出てきました。そういった状況でも前を見て暮らす人々を見ていて、少しでも力になりたいと思いました。